

ハイデルベルク信仰問答講解説教 16 「最も激しい試みにも」(2011年12月11日 礼拝説教)

【聖書箇所】

災いのふりかかる日、わたしを追う者の悪意に囲まれるときにもどうして恐れることがあろうか。財宝を頼みとし、富の力を誇る者を。神に対して、人は兄弟をも贖いえない。神に身代金を払うことはできない。魂を贖う値は高く／とこしえに、払い終えることはない。人は永遠に生きようか。墓穴を見ずにすむであろうか。人が見ることは知恵ある者も死に、無知な者、愚かな者と共に滅び、財宝を他人に遺さねばならないということ。自分の名を付けた地所を持っていても／その土の底だけが彼らのとこしえの家／代々に、彼らが住まう所。人間は栄華のうちにとどまることはできない。屠られる獣に等しい。これが自分の力に頼る者の道／自分の口の言葉に満足する者の行く末。〔セラ。陰府に置かれた羊の群れ／死が彼らを飼う。朝になれば正しい人がその上を踏んで行き／誇り高かったその姿を陰府がむしばむ。しかし、神はわたしの魂を贖い／陰府の手から取り上げてくださる。〔セラ (詩編49：6-16)〕

イエスがそこを出て、いつものようにオリブ山に行かれると、弟子たちも従った。いつもの場所に来ると、イエスは弟子たちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われた。そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこう祈られた。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。〔すると、天使が天から現れて、イエスをかづけた。イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴のように地面に落ちた。〕イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに戻って御覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。イエスは言われた。「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていないさ。』(ルカ22：39-46)

【説教】

今日は、第16主日、問40-44までのところを読んでまいります。ここは使徒信条で言えば「死にて、葬られ、陰府にくだり」の部分であります。主イエス・キリストはただ十字架につけられたばかりではありません。その十字架で本当に死なれ、墓に葬られ、そして陰府に下ります。そのようにして使徒信条はキリストの死を徹底して言い表します。またそれに呼応してか、ハイデルベルク信仰問答も、このところは随分問答を重ねて、その死の意味を丁寧に言い表しています。

今日のところで一つ気になりますのは、問44で扱っております「陰府」ということについてです。これは新約聖書では「ハデス」と言いますが、ローマカトリックとプロテスタントでは解釈がだいぶ違います。またプロテスタントの中でも様々な解釈があります。まずカトリックでは「煉獄」という死者の行く場所を指しています。死者の魂が終末まで一時的に置かれる場所だということです。プロテスタント教会ではそういう解釈はいりません。わたしたちの教会、特に改革派の伝統にある教会ではそういう死者の行く世界というよりも、神さまとの関係の絶たれた罪の状態の極みと理解しています。そしてハイデルベルク信仰問答もこのように解釈していると理解してよいでしょう。問44を読みましょう。

死者の行く世界とすることに何か問題があるのでしょうか。わたしたちもそこは気になるところかもしれません。わたしたちはこの地上の命を終え死んだらどうなるのか。そういう死者の行く世界に一時的に置かれるのか。置かれるとすれば、それはどのような状態で置かれるのか。霊だけが置かれるとすれば体はどうなるのか。いろいろな疑問があります。しかし聖書はそのようなことは語らないのです。「ハデス」の存在は語っても、具体的にそこがどういふものかは語っていないのです。そこでまず大前提のこととしては、聖書が語らないことをわたしたち人間が語ってはならないということです。人間が勝手にあれこれ詮索して、都合の良いように考えてしまうことがあります。

例えば、「死後回心」という解釈があります。つまり人間は死んだ後でも回心することができる。死者の世界にキリストが赴かれ、そこで伝道して救われる者がなお起こされるのです。解釈によってはそのように読めないでもない聖書の箇所があります。1ペトロ3：19。しかしだからといって、そこで死後回心が可能であるとは断言できません。こと救いに関しての重大な問題ですが、それを断言できるだけの確かな根拠はないのです。わたしたちは聖書が語ることで充分としなければなら

りません。それ以上のことは慎まなくてはなりません。その場のど、無責任なことは言えないのです。それは神さまに委ねるべきことであります。

死者の行く世界とした場合の最も重大な問題点は、肉体は死んでも、霊は生きているという霊肉二元論が成り立つということです。霊だけ生きてそういう世界に行くというのです。聖書の信仰は霊肉二元論ではありません。人間はあくまでも霊肉分たれず、総体として理解しています。だからよみがえりも霊だけではなく「身体」がよみがえります。この身体のよみがえりについては、また次回の信仰問答で扱うことになると思いますが、その理解でいくと死者が一時滞在する場所があるというのはおかしなことになるのです。ではそこでの身体はどうなっているのか。もし死後回心があるなら、その時の救いは霊だけの救いということなのか。

使徒信条が作られた初代教会の時代はローマ帝国の支配にありましたが、そこでは信仰もローマの影響を強く受けました。ローマは、ギリシャ、ヘレニズム文化であります。そのヘレニズム文化の中で最もキリスト教にとって脅威となったのが、グノーシス主義です。これは先ほどから言う「霊肉二元論」を主張します。肉なるものは悪、人間は霊の存在として救われると説いた。しかしそれと真っ向から衝突したのがキリスト教信仰です。クリスマスが近づいてまいりますが、このクリスマスの出来事を「受肉」と言います。真の神が真の人間になられる。信仰問答では問35「おとめマリヤの肉と血とからまことの人間性をお取りになった」と言います。そこでは神さまがわたしたちと同じ肉体をとられる。それはわたしたちが霊肉共に救われるためであります。しかし肉体を悪とするグノーシス主義では、それは考えられないことであります。

そしていつの間にか、そのグノーシスの影響をキリスト教も受けてしまいます。そういう中でキリストの人性を否定する「キリスト仮現説」というものが出てきます。キリストの地上の姿は仮の姿であって、そこに神さまの本質はないと主張するので。だから本当は十字架で死んでいないと言うのです。十字架の時に、神の御子はとくに見せかけの身体を離れて、神の下へと戻っていた。だから苦しんでいない。神さまが苦しんだり、死んだりするわけがない。彼らが救いとするのは、この肉体の幽閑から魂が解放され天へと昇っていくことなのです。

そうなると信仰は精神化されます。実体の伴わない架空の世界の話になってしまいます。でもわたしたちが救われるという

ことはそういうことでしょうか。肉体の生きるこの世から離れ、現実逃避していくことでしょうか。そうではない。そこでは人間全体が救われる。特に人間は罪の問題があります。その罪がどこに最もよく現れるか。それはこの肉体を使って生きる毎日の生活であります。ですから霊だけではなく肉体の深い部分においても健やかにされる必要があります。その肉の部分に神さまはイエス・キリストを通して、どこまでも深く担われる。それは死にまで及ぶものであります。そこまで行かなければ本当に人間を救うことにならないのであります。霊の部分だけ、表面的に救っても仕方がないのです。

人間は罪を犯しました。それは神さまとの関係を自ら壊したということです。それはこの信仰問答でも繰り返して見えて来たことです。信仰問答では罪の人間は神さまと人間を憎む傾向にあるとさえ言います。その人間はどうなるのか。当然その罪の責任を負わなければなりません。「塵にすぎないお前は塵に戻る」(創世記3:19)それは死を意味します。それが罪の行き着く先なのです。パウロは言います。「罪の支払う報酬は死である」(ローマ6:23)と。人間はこの罪を、死を持って償わなければなりません。

けれどもこの罪の償いとしての死をキリストが引き受けられたのです。問40、「神の義と真実のゆえに」神さまは決してこの罪をうやむやにはされません。でも誰がこれを償えるのか。罪のある人間は他の者の罪を償うことはできません。迷っている者が同じように迷っている者を導くことはできないのです。ですから罪のないお方がこの償いを引き受けなければならぬのです。「神の御子の死による以外にはわたしたちの罪を償うことができなかったからです」というのはそういう理由です。

その償いは、死と葬り、陰府下りと徹底されます。罪の人間が最終的に行き着く結末である死、そして陰府にまでキリストは下り、その罪の呪いの矢面に立たれます。陰府とは、わたしたちの解釈では、罪ゆえに神さまとの関係の完全に絶たれた状態です。それは例えば今日読みましたルカによる福音書で、ゲッセマネの祈りの場面がある。そこで主イエスが苦しみもだえて祈られる。「イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴のように地面に落ちた」(44節)とあります。この苦しみ。それは神さまとの断絶、罪の結末を負う苦しみ、悲しみです。この時、弟子たちは眠ってしまいます。「悲しみの果てに」とあります。この悲しみに彼らは耐えられません。この罪の悲しみをまともに負うことができない。それが人間の姿であります。だからこそ主イエスがこれを負うのです。

そしてその苦しみは、あの十字架において頂点に達します。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」そこに完全に神さまに捨てられる罪の人間の結末があります。それを主イエスが負われるのです。死を前にして苦しんだり、叫んだり、なんて見苦しい。もっと立派な死に方をする人はいくらでもいる。そう思う人もいるかもしれませんが。でもある人はあえて「主イエス以上に死を恐れた者はいない」と言います。それは死が何を意味しているのか考えればよく分かることではないでしょうか。それは神さまとの断絶なのです。神さまに捨てられる絶望。そこには何の希望も光もない。わたしたちは本来そのような死を死ななければならなかった。これは大きな試みです。主イエスが血のような汗を滴らせるような激しい試みです。わたしたちは耐えられません。でもそれをわたしたちに先回りするようにして、主イエスがその肉体においても魂においても負われるのです。わたしたちが一番恐れていたことを引き受けてくださるのです。

それによって、わたしたちの死の意味が変わりました。問42を読みましょう。おもしろい問いの立て方です。キリストがわたしたちのために死んでくださった。でもわたしたちはそれでも死ぬのです。それはどういう意味があるのか。それは自分の罪に対する償いなのではない。それはキリストが負ってくださった。わたしたちの死は、罪との死別、永遠の命への入口と変えられる。そのように死の意味が変わってしまう。死につい

て一番恐れていたことはもう心配ないのです。これは大きな慰めではないでしょうか。死んだらどうなるのか。救われるのかどうか。わたしたちはそこを悩む心配はない。その悩みはキリストがもう解決しておられる。だから安心して最後を迎えられるのです。わたしたちは裁きの死を死ぬのではない。そこからいよいよ永遠の命を生き始める。もうキリストに結ばれているわたしたちはその永遠を生きているのですが、死はそれを絶つものではなく、そこからわたしたちはますますこの永遠を感じつつ、新しい命を生きていくのであります。

そのようにキリストが死んで陰府にまで下って霊肉共に罪の支配からわたしたちを解き放ってくださったことにより、わたしたちの生き方は大きく変わります。問43を読みます。これは「聖化」と理解してよいでしょう。わたしたちは次第次第に罪に死に、新しい命を現して生きることができるようになります。そこに身体も霊も健やかに生きる新しい本当の自分があるのです。お祈りをいたしましょう。